

橋本俊詔著『遺伝か、能力か、環境か、努力か、運なのか』平凡社新書（2017年）

（統計調査で何かと話題の）厚生労働省の「国民生活基礎調査」によれば、2015年の貧困率（相対的貧困率＝等価可処分所得の中央値の半分を示す貧困線に満たない世帯員の割合、熊本県を除く）は15.7%、子どもの貧困率（17歳以下）は13.9%となっている。さらには、子どもがいる現役世帯（世帯主が18歳以上65歳未満で子どもがいる世帯）のうち、大人が1人の世帯員の貧困率は50.8%と半数を上回っている。

昨今、“貧困の連鎖”という言葉をよく耳にする（“”は筆者、以下同様）。家庭の経済格差が子どもたちの教育格差を生み、将来の所得格差を生んでいる、というのである。上記のような事象のみならず、さまざまな面で格差が拡大し、固定化が進んでいる。格差是正の取り組みは喫緊の課題といえる。

もし人生のスタート地点が不利な状況にあったなら…将来はお先真っ暗なのか。お金持ちに生まれなかったら、天賦の才を持ち得ていなかったら…人生を謳歌することはできないのか。その差は、遺伝なのか、努力なのか、運なのか、それとも…。本書は、何によって人生が決まるのか、遺伝、能力、環境、努力、運という視点をもとに多角的に検討を加えている。

本書の構成は、「第1章 遺伝－親が優秀なら子どもも有能か」、「第2章 能力－体力、知力、学力、性格……」、「第3章 環境－育てられ方、教育の受け方」、「第4章 努力－どれだけ頑張ればいいのか」、「第5章 運－運・不運を探求する」といった5つの章からなる。

著者は「遺伝子は神ではなく歯車」にすぎず、「遺伝で決まる不利な初期条件を、人の育て方や教育、あるいは環境の整備によって変えることがありうる」と指摘する。また、「子どものときにおけるまわりにいる仲間、友人がどういう人であるかは、その人の人格や学力の発達、あるいは人生の送り方に大きな影響がある」とも指摘しており、この点は子どもの時ならず、大人になっても共通する部分は多々あると思われ、うなずける（「第1章 遺伝－親が優秀なら子どもも有能か」）。

遺伝といった点に関しては、“蛙の子は蛙”や“鷹が鷹を生む”ということわざもあるように、本書では（細かくは触れないが）著名な芸術家やスポーツ選手の事例も多く取り上げられている。そこには、親から引き継いだ遺伝子に基づく資質が当然あるものの、その後の成長環境（教育方法や指導者との出会いなど）や自身の努力などの要因によって、彼らが成功につなげていることがつまびらかに紹介されている（「第4章 努力－どれだけ頑張ればいいのか」）。

さらに、“運も実力のうち”（著者曰く「自分で、できるだけ努力をするというのが、運を呼ぶための前提条件、あるいは必要条件である」）…という言葉も取り上げられているが、筆者の率直な思いとしては、遺伝や環境などの要素を乗り越えて人生を歩き続けるには、自身がおかれた環境の中で自身ができることを日々努力し続けて頑張るしかない、そう実感させられる（「第5章 運－運・不運を探求する」）。

人は学びや経験、環境など、さまざまな要因が重なり合い成長していく。労働組合の世界に限るわけではないが、組合活動への参加、組合役員としての経験が、仕事や会社組織に対する見方、自身のスキルやキャリア形成などに大きく影響することもあるだろう。性格的な向き不向きもあるだろうが、なかにはその世界に足を踏み込んだのが“運の尽き”と思っている人もいるかもしれない。

自身のキャリアは、能力のみならず努力やタイミング、人との出会いやつながり、運などがマッチしたからこそ積み上げられていくものだろう。ただし、そこには自身の強い信念と何事にも立ち向かう姿勢、意志の強さも重要である。そういった考えを持てるかどうかは遺伝的要素による影響？があるのかもしれないが、これも自身の経験や努力、環境、人とのつながりなどによって変わらうるものに違いない。（小倉 義和）